

「総合的な学習」等に生きる地域学習に関する研究

- 県内小学校中学年における社会科副読本の分析を中心に -

研修主事 市川 則文

1 研究の趣旨

21世紀の教育の重要な目標は、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考えるなどとする「生きる力」の育成である。学習者自身が、自らの生活の基盤である地域社会のあらゆる事象を、学習対象にする地域学習は、まさしく学習者の日常生活と学習を結びつけることになり、「生きる力」育成のためには極めて価値ある学習といえる。つまり、地域学習は、地域共同体・現実社会の中でどのように生きていくかを考える学習でもある。

このようなとき、三重県内の市町村教育委員会の多くでは、2002年に向けて小学校3, 4年生の副読本の改訂作業が進められる予定になっている。その具体的な内容の詳細は、不確かであるが、社会科の副読本としての位置づけ・扱いを変更しない限り、従来のような社会科としての活用（学習）の域をでないのではないかと推測される。そこで、本研究は、現在、発行されている県内の社会科副読本の分析を通じて、以下の二つの点で研究を深めたいと考える。

21世紀の教育の目標である「生きる力」育成のために、どのような地域学習が今後にも有効かつ重要なのか等を考察する。

「社会科」「総合的な学習」なども視野に入れた、地域に親しみ追究の深まりを持つ副読本を作成するための具体的な視座や問題提起をする。

2 研究の内容

(1) 地域学習の意義と21世紀の地域学習のあり方

< 意義 >

学習主体者の「構え」の変貌
足元から始まる多面的複合的な追究の誕生
「開かれた学校づくり」への必然化

< あり方 >

「各」学校の主体性の確立
事例としての位置づけの明確化
- 第一の目的から第二の目的への「橋渡し」を -
「問いと答えの間」を「長く」の実践に

(2) 県内発行市町村副読本の現状

ア 市町村教育委員会回答のアンケート等から

発行している市町村の数・・・45市町村と1郡（3町1村合同） 発行を新規に予定している市町村・・・1町
児童への配布費用・・・全市町村・郡ともに無料 副読本「指導書」の発行・・・3市町 等

イ 寄贈された副読本の分析

- ・3, 4年生副読本としての位置づけであり、しかも検定教科書を使用としない学習が可能となっている。
- ・学習方法・学び方の記載については、「見学のしかた」「まとめ方」等がほとんどの副読本にある。
- ・子どもが直接的に記入できるスペースが、ほとんどの副読本になく、解説・説明的な文章になっている。等

(3) 副読本作成の視座

- ・総合的な学習を視野に入れた場合、小学校6年間で使える内容構成を考慮する必要性がある。地方自治や地域の歴史や遺跡、産業学習なども候補にあがるし、地域の自然なども重視する。
- ・副読本作成では、資料の扱いについて十分な検討がある。写真が優れている場合もあるが、写真が多すぎてかえって子どもの追究を削ぐ場合もある。
- ・開かれた学校の視点からして、編集体制も教職関係以外からも参画が求められる。
- ・副読本もあくまでも事例であることの明記が必要であり、このことは教師だけが知っていることでなく学習の主体者である児童はもちろん、保護者にも十分に理解していただく記述が必要である。 等

3 研究のまとめ

今回の研究は、県内で発行されている副読本の分析を通じて、今後の地域学習のあり方と副読本作成の視座を得るものであった。当初のねらいと比して、十分な成果を得たものではないかもしれないが、いくつかの問題提起はできたものとする。

今後、地域と学校の連携は、様々な点で益々重要視されていくことになる。その場合に、「各」学校の「各」教師が、真に地域と結びつきながら地域学習をカリキュラムに組織することができるかに、学校の再生や特色が生まれるに違いない。その場合にも、ここで明らかにした副読本の作成の視座や地域学習のあり方は、参考になるものと思う。

< 訂正 > なお、CD-ROMに集録した拙論の数カ所を次のように訂正するとともに関係機関等に深く謝罪したい。

6頁右段5行目「木曾崎」 「木曾岬」、同「玉城町」 削除、同11行目「芸濃町」 「阿児町」、同21行目「将来の展望」 「これからの浜島町」。